

岩城光英の永田町だより vol.300

東京ではすっかり春めいて、桜も満開となりました。道行く人々の表情も明るくなってきたような気がいたします。

新年度が始まりました。衆参両院の各委員会で議案審議が本格化します。

国は、今日から施行される消費税率改定を踏まえた経済成長と財政再建、集団的自衛権等、重要な課題に取り組まねばなりません。日本と北朝鮮、ロシアとウクライナの外交問題も横たわっております。

福島・宮城・岩手など被災地復興の加速化に力を注ぎ、復興を実感できるように努めてまいります。



“永田町だより”が、今号で通算300号となりました。新年度第1号は300号記念として、北野先生の時評枠を拡大してお送りいたします。飽食の時代と言われて久しい日本ですが、第1の開国が明治維新、第2の開国が第2次世界大戦、そして東日本大震災後は第3の開国と、ある作家が評しております。“温故知新”。現代に生きる私たちの父母や祖父母が生きた、ごく身近な“戦後”を振り返る時、困難に立ち向かう勇気を見出すことができるのではないのでしょうか。

「戦後日本の礎を創った男達」 北野湘南

日本は、世界第3位の経済大国で経済力はドイツの1・6倍、イギリス、フランス両国が束になっても日本に及ばない。1人当たりの所得はスウェーデン、ノルウェーなどの北欧には及ばないが、欧米並みとなっており、世界2位の経済大国と鼻息の荒い中国の8倍以上だ。安心、安全では世界最高水準である。終戦直後にその日の食べ物に事欠いた日本が、世界の一等国に登りつめることができたのは国民の努力の賜物だが、その一方で日本の舵取りを果たした人達の功績も大きい。300記念号として「明日の日本を考える糧にしたい」との思いから戦後日本の重要な舵取りを果たし、今日の礎を築いた3人の男達の足跡を追ってみた。

太平洋戦争による日本の被害は、消失した家屋250万戸、被災者900万人。陸・海の軍人、軍属と一般国民を含めた死亡・行方不明者は正式な統計で255万人、実際には300万人に達したとされる。そして国富の約3分の1を失ったことから最大の問題は食糧不足だった。終戦直後の1946年の配給食糧のカロリーは、国民1人あたり1170カロリー。翌年でも1290カロリーに過ぎず、それも予定通りには配給されなかった。1千万人が餓死するとされるほど深刻な食糧不足に陥っていた。多くの国民は闇市場で食糧を確保し何とか凌いだが、「法を守る人間が違法行為はできない」と闇食糧に手を出さなかった東京地裁の山口判事は、栄養失調で死亡するという悲惨な事件も起きている。

こうした混乱の中で日本は財閥解体、農地改革、労働三法の戦後の三大改革を進め、これが日本経済発展の基礎となる。疲弊しきっていた日本経済立ち直りのきっかけとなっ

たのは朝鮮動乱だ。朝鮮動乱の特需によって立ち直りを見せるが、当時の日本は独立国ではあったもののGHQが“実質統治”していた。アメリカとの講和条約に調印し、名実とも独立国としたのは吉田茂だ。当時の日本では野党だけでなくマスコミ、進歩的文化人などからも、アメリカとの単独講和条約への反対論が、極めて強かった。彼らの主張は「アメリカとの単独講和でなくソ連、中国などを含めて全面講和」というものであった。当時はアメリカとソ連とが、激しく対立する東西冷戦の真ただ中だ。国内の激しい反対を押しつけて吉田がアメリカと講和条約を結ぶことは、日本が自由経済体制のアメリカ、イギリス、フランスなどの西側の一員になることを宣言したに等しい。GHQ戦後の日本経済は「アメリカがくしゃみをすれば日本が風邪をひく」といわれるほど、アメリカとの強い経済関係を背景に成長した。ベルリンの壁の崩壊を契機に、ソ連とその同盟国である東欧各国の社会主義体制は崩れ去った。それによって、社会主義国家が貧困、人権弾圧など理想とかけ離れたものであったことが、白日の下にさらされた。吉田の判断が正鵠を得ていただけでなく、野党などの主張した誤った方向へ導かず日本の基礎を創ったことがはっきりするだろう。吉田は45、48、49、50、51代の5期も首相を務め在任期間は2616日の長期にわたる。その間に政界入りさせた優秀な官僚らを優れた政治家に育て上げ、「吉田学校」とも称された。吉田学校からは、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、大平正芳、鈴木善幸らの首相や、自民党の派閥の領袖となる逸材を多く輩出した

その一方で、気にいらぬ質問をした新聞記者に水の入ったコップを投げつけた。野党の質問に腹を立てて「馬鹿

野郎」と叫んで国会を解散するなど、「ワンマン」としても有名だ。だが、政界を引退して大磯に隠棲してからも、政財界人の訪問が後を絶たなかった。国葬による葬儀となったが、多くのテレビは特集番組を放映して吉田の功績を称えた。単なるワンマンでなく豊かな人間性を兼ね備えていたことは、これでも証明できよう。

54年前の1960年夏、日本国内は「安保反対」のデモの波で騒然としていた。最初の日米安全保障条約は、吉田茂がアメリカと講和条約締結の時に結んだ。日本が、事実上GHQの支配下にあったことから日本の地位保全などで多くの不利益があった。岸信介首相がこの改定案を国会に提出したが、野党からの激しい反対だけでなく、労働組合、全学連の学生らが、数万人単位で連日のように国会に押し寄せていた。反対の輪は全国に広がり、各地で「安保反対」のデモが吹き荒れた。反対のデモ隊は、連日のように渋谷・南平台の岸の私邸近くにも押し寄せた。岸は私邸で孫（現在の安倍首相）を膝に乗せて時間を過ごすことも多かったが、その孫がデモ隊の声を真似て「安保反対」と叫びながら遊ぶ姿に苦笑していたという。

岸は「反対のデモ隊員の中で改定安保条約をきちんと読んでいる者はどれだけいるのか」と訝ったとされる。事実、野党の質問も「極東の範囲とはどこまでか」といったおよそ本質論から外れたものが目立った。筆者が大学に入学した時点では安保反対のデモに参加した先輩も学内に残っていたが、その学生の殆どは条約を読んでいなかった。岸の指摘が間違いでなかったことも事実だ。アメリカ大統領の特使が、反対のデモ隊に巻き込まれてヘリコプターで救助されるといった激しい反対運動にも関わらず、自民党が安

保改定は絶対必要であることで一致結束していたこともあり、60年6月に改定安保条約は正式に批准された。

岸は、あまりにも激しい反対運動のために「死」を覚悟したとされる。その一方で条約の批准が正しかったことは、「50年後に証明されるだろう」と予言していた。日本固有の領土である尖閣諸島の海底に豊富な石油資源のある可能性が明らかになると、中国は自国の領土と主張するようになった。最近では日本の経済的排他水域に艦船を毎日のように入り込ませている。さらに航空母艦の建造など軍事力の強化を背景に、沖縄まで中国の領土との主張し始めている。中国は、太平洋を2つに分けて東はアメリカ、西は中国が支配したいと持ちかけたことさえある。そして韓国と組んで日本批判をエスカレートさせる一方だ。日本を守っているのは、安保条約と自衛隊の存在であることは間違いない。死を覚悟して批准を果たした岸の予言は的中した。野党やデモ隊の圧力に屈して安保条約を批准していなかったら？ 想像しただけでも背筋が寒くなるだろう。

岸の退陣を受けて首相に就任したのが、池田勇人だ。池田は「寛容と忍耐」「私は嘘を申しません」などの発言で国民の心を捉えた。また、料亭への出入りもストップし、カレーライスで閣僚と懇談するなどの低姿勢も国民にアピールした。そして最大の公約は「10年以内に皆さんの所得を倍にします」という所得倍増論だ。1956年の経済白書は「もはや戦後ではない」と日本経済の復権を宣言していたが、日本は先進国の仲間入りどころか、経済力は中位程度であった。テレビ・洗濯機・冷蔵庫の三種の神器を揃えた家庭は少なく、マイカーは多くの国民にとって高嶺の花だった。それだけに国民の多くやマスコミの反応は「池田内閣の大

ぼら」と冷ややかだった。

だが池田は経済学者を中心とするブレーンから、日本経済が既に自由経済世界でカナダを追い抜いて世界上位の地位にあり、急速な拡大を続け高度成長の波に必ず乗るとの確信を得ていた。一方、経済成長を成功させるために国内では貿易の自由化促進、経済の開放などを着々と進めていった。そして対外的には1964年OECD（経済協力開発機構）への加盟、IMF（国際通貨基金）8条国への移行を果たし先進国入りする。1966年にフランス、翌67年イギリス、68年ドイツを抜いて、世界第2位の経済大国に登りつめた。池田がフランスを訪問しドゴール大統領と会見した後に、誇り高いドゴールは「トランジスターのセールスマン」と揶揄した。その直後にフランスを抜いて日本が、世界第2位の経済大国に躍進するとは夢にも思わなかったろう。

日本の急速な経済成長により10年後どころか8年足らずで国民の所得倍増を達成し、公約達成の年にあたる1970年には2.7倍となっている。「大ぼら」どころか公約を遥かに上回る実績を残した。1964年に東京オリンピックが開催され、世界各国から多くの観光客が訪れた。オリンピックに合わせ、時速300^{キロ}を超える超スピードで走りながら大きな事故を一度も起こさないため、世界の奇跡とされる新幹線も開通させた。オリンピックは、日本が戦後の回復を成功させ高度成長を開始したと世界に宣言する、絶好の機会でもあった。「貧乏人は麦を食え」「中小企業の5つや6つつぶれても」などの“失言”もあったが、その多くは池田の真意でなくマスコミのミスリードによるものだ。高度成長の道を驀進し現在の豊かな日本の礎を創り上げたのは、池田の功績といっても褒め過ぎでないだろう。（文中敬称略）